

# 大伴家持天平二十年春正月の歌

——写実と類型について——

鳥 田 裕 子

## 一

天平十八年七月、大伴家持は越中国へ国守として赴く。二十九歳の秋である。越中国守時代は五年間にすぎない。しかし、作歌総数四七三首中二三三首と、きわめて歌数が多く作歌意欲が旺盛であり、独自の歌風をこの時期に形成したのである。窪田空穂氏は、家持の越中赴任を、「京の歌界の雰囲気から離れ、獨り任地に過ごすことになる」と、偶然にも彼の歌人生活には、展開進歩が起こつてきたのである……本来の持ち味の上に立つてのことであるが、それが徹底に向ふと共に、一家の風格を確立してきた<sup>1)</sup>と評する。

家持がそれまでの模倣性の強い類型的な歌風から、彼の資質をきわやかに熟成していく過程を天平二十年春正月の四首を対象に考察していきたい。

## 二

越中国の行政区画は著しく変わる。初出は『続日本紀』大宝二年（六九八年）で、その当時北陸は、越後、越中、越前、若狭という

大伴家持天平二十年春正月の歌 —— 写実と類型について ——

行政区画に分かれていた。幾度かの変遷の後、天平十三年（七四一年）には、能登国が越中国に併合され、出羽、越後、越中、越前、若狭という行政区画が施行され、能登国が分離する天平宝字元年（七五七年）まで、この区画は続く<sup>2)</sup>。

家持が、国守に任命された時は、能登国は越中に合併されており、越中は大國・上國・中国・下國の上國で、大きな行政区画の国であった。

国司は中央政府から派遣される地方官で、守、介、大掾・小掾、大目・小目の四等官の総称である。国司の任期は、時により四年から六年で、家持は五年二ヵ月滞在しており足かけ六年で交代している。地方の豪族から任用する郡司（大領、少領、主政および主帳等）とは違い、中央政府の政策を国内に浸透させる役目を担い、一國の民政裁判を掌る<sup>3)</sup>。越中は、上國なので、介、掾、目、各々一人からなるが、当時、目が大目と小目二人を置くのは、能登合併のための特別の措置とみられる。

越中の政庁である国府は、現在の富山県高岡市伏木町古国府の真宗寺院勝興寺のあたりにあった。二上山東麓の高台に位置し射水川

が東に流れ、富山湾奈良の海を見おろす眺望のよい所である。<sup>4</sup> 国守館も国庁を少し下った伏木測候所あたりで、ここも見晴らしのよい高台にある。<sup>5</sup> 伏木の地名は元來、「出雲国意宇郡出雲郷の国府址を、今、府敷と呼んでゐるのは、府のあったところといふ意と解されるから、これによると伏木も亦、府敷の意であつて、国府の無くなつた後に起こつた称呼かも知れない」(鴻巣盛広『北陸万葉集古蹟研究』)と、鴻巣氏が言われるように国府跡を示す名称である。ことも考えられる。国府の規模は、「ほぼ方六町域」(藤岡謙二郎『国府』)と推定され、役所、学校、倉から成つていた。役所には、税所、大帳所、調所、朝集所、健児所、国掌所、田文所、公文所、弁濟所の各部所がある。学校は、学館、廟。倉は穀倉、兵庫、粮糶庫、鈴藏。倉屋の数は三十〜四十程度、と川口常孝氏は考察される。<sup>6</sup> 越中は大國ではないが、上國で家持には榮転であつた。

天平十八年八月七日新しい国守着任の宴が国守館で催される。ここに掾大伴宿禰池主、大目秦忌寸八千鳥の名が見える。また、天平十九年四月二十六日、大伴池主の館での宴には、介内藏忌寸繩麻呂の名が見える。天平二十一年には少日秦伊美吉石竹はたけの館での宴も記してある。国守家持を補佐する国司は、右のような人々である。

次官、介内藏忌寸繩麻呂は、天平十七年十月二十一日の「大藏省移」(『正倉院文書』)に「正六位上行少丞内藏忌寸繩麻呂」とあり、大藏の少丞であつた。それ以後越中国介に転任し、天平勝宝五年三月には造東大寺判官として京にいる。歌は一八・四〇八七、一九・四二〇〇、一九・四二三三、一九・四三三〇左注、一九・四二五〇、一九・四二五一題詞にも名が見え、家持を中心とする越中での宴に

よく列席している。

三等官掾大伴宿禰池主は、同じ大伴の一族である。血縁関係は分らないが、国司には「三等以上の親を用ゐることを得じ」(『選叙令』)とあるので、従弟よりは遠い間柄であつた。天平十年十月、橘奈良麻呂の宴に同席して、ともに歌を詠んでゐる。どのくらい親しかつたのかは分からないが、越中での再会で歌友として親密な交遊が始まる。天平十九年秋、弟書持を亡くしてから、池主が、家持の歌に与えた影響は計り知れない。越中での池主との交遊なくして、歌人家持は語り得ないほどである。池主は家持が赴任したときにはすでに着任しており、天平十九年夏に越前国の掾に転任している。

天平勝宝五年には左京少進、天平勝宝八年には式部少丞であつたと万葉集中にみえる。しかし、天平宝字元年(七五七年)の橘奈良麻呂の宴に連座して捕まり、命を落したと思われる。その後、彼の記載は諸文書にない。

大目秦忌寸八千鳥は、国司の四等官で、八千鳥については伝未詳である。

少日秦伊美吉石竹も同じく四等官。『続日本紀』に天平宝字八年十月「正六位上秦忌寸伊波太氣授<sup>二</sup>外従五位下<sup>一</sup>」、宝龜五年三月「爲<sup>二</sup>飛驒守<sup>一</sup>」、七年三月「外従五位下秦忌寸石竹爲<sup>二</sup>播磨<sup>一</sup>」介とある。

家持を迎えた四人の国司は、ともに京の人であり、位の上下はあれるけれど、国庁付近にある各々の公舎で度々宴席を催し、歌を詠み、京を偲ぶ。国守家持を中心に越中歌壇とも言うべく風流な歌が詠まれ、家持にとっては越中は居心地のわるいところでは決してなかつ

た。

三

国守は二上山のふもとの小高い丘にあり、そこからは奈良の海、そして富山湾を眺望することができた。京育ちの家持にとつて、このように毎日海を見ることは珍しいことであつた。美しい海や山に恵まれて、若い国守は越中の風土を積極的に歌い込もうとする。特に国守でも国守館でも日々みはるかす富山湾、奈良の海は彼の作歌意欲を刺激したようで、何度か繰り返し、練り直し詠んでいる。京にはない自然に触れて、それまでの類型的な発想・表現から抜け出し、対象を把握しようとする姿勢がみえる。越中の風土が、彼に与えた影響は大きい。

あゆの風 越の俗の語に東の風をあゆのかせといふ いたく吹くらし奈良の海  
人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ (一七・四〇一七)

湊風寒く吹くらし奈良の江に妻呼びかはし鶴さはに鳴くへ  
に元ふ、「鶴騒くなり」 (一七・四〇一八)

天離る鄙とも著くこころだくも繁き恋かも和ぐる日もなく  
(一七・四〇一九)

越の海の信濃 しんぬ 浜の名なり の浜を行き暮らし長き春日も忘れて思へ  
や (一七・四〇二〇)

右の四首、天平二十年春正月二十九日、大伴宿禰家持  
右の歌群は、天平二十年一月に守大伴宿禰家持が歌つたものであ  
る。

第一首、第二首が奈良の海的情景を、第三首、第四首は望郷を抒

大伴家持天平二十年春正月の歌 —— 写真と類型について ——

情的な調べで歌い上げている。この四首の歌群を以下詳しく検討し  
ていく。

まず第一首。

あゆの風 越の俗の語に東の風をあゆのかせといふ いたく吹くらし奈良の海  
人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ (一七・四〇一七)

あゆの風は越中方言で、今でも海から吹いてくる北東や北々東の  
風を年配の人は「あいの風」と呼んでいるという。また、「札記」  
月令には「東風解氷」とあり、東風が吹きそめて氷を解かすとい  
う意を伏線にしていても考えられる。あゆの風は、万葉集中では、  
家持の孤語であり、四〇〇六にも取り入れている。越中の方言を取  
り入れた進取の気分もあらわれている。東風をアユと呼んだところ  
に初春の訪れをよろこぶさわやかな語感が作者の気に入ったのだろ  
うか。

しかし、家持があゆの風を歌つたのは、この歌を入れて四首であ  
り、先行歌の一七・四〇〇六の「あゆの風いたく吹けば」は四月三  
十日、十八・四〇九三の「英遠の浦き寄する白波いや増しに立しき  
寄せ来あゆをいたみかも」は五月十日頃。一九・四二二三の「あゆ  
をいたみ奈良の浦廻に寄する波いや千重しき恋ひ渡るかも」は五月  
六日から二十日の間で、いずれも初夏から仲夏の歌であり、新潮  
古典集成本や小学館古典全集本の注に、あゆの風に春風の意をこめ  
たという解釈はあたらない。むしろ、「あゆの風」が「いたく」と  
結びつくこと、家持自注に「越の国の俗の語に東の風をあゆのかせ  
といふ」とあることより、家持の歌では、北東にひらける富山湾よ

り「時に吹く海の風、それを『あゆの風』といい、家持はそれを『東風』ととらえた」という小野氏の説に従いたい。

加えて、家持は越の国の俗の語の「あゆのかぜ」という語感に興味をもち、歌語に取り入れたのではないだろうか。集中四首すべて家持作歌であり、月日を隔てて繰り返し用いたところ、彼の好きな語句であったと考えられる。また、

a 桜田へ鶴鳴き渡る年魚市濁潮干にけらし鶴鳴き渡る

(三・二七一 高市黒人)

b 鳥伝ひ敏馬の崎を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さわに鳴く

(三・三八九 若宮年魚麻呂誦之。但未審作者一。)

という第二首、四〇一八歌の類同表現歌に「あゆ」ということばがあるのも偶然とは思えない。「年魚」のひびきをもつ俗語「あゆのかぜ」に歌人家持が鋭敏に反応したのも、先の a・b 歌、特に a の黒人の歌からの連想が強かつたのではなからうか。

また、家持の奈呉の海を詠んだ歌は、天平十八年八月、大目秦忌寸八千鳥が詠んだ、

奈呉の海人の釣する舟は今こそば舟棚打ちてあへて漕ぎ出ぬ

(一七・三九五六)

の歌に直接の影響を受けている。奈呉の海の歌は集中一五例ある。その例を見ていけば、

① 舟泊ててかし握り立てて慮りせむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも

(七・一一九〇 藤原卿)

② 名児の海の朝開のなごり今日もかも磯の浦廻に乱れてあるらむ

(七・一一五五 作者未詳)

③ 住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず

(七・一一五三 作者未詳)

④ 名児の海を朝漕ぎ来れば海中に鹿子そ鳴くなるあはれそ鹿子

(七・一四一七 作者未詳)

⑤ 奈呉の海人の釣する舟は今こそば舟棚打ちてあへて漕ぎ出ぬ

(一七・三九五六 大目秦忌寸八千鳥)

⑥ 奈呉の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れなば

(一七・三九八九 家持)

⑦ あゆの風越の俗の語に東の風をあゆのかぜといふいたく吹くらし奈呉の海

人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ (一七・四〇一七 家持)

⑧ 湊風寒く吹くらし奈呉の江に妻呼びかはし鶴さはに鳴く

(一七・四〇一八 家持)

⑨ 奈呉の海に舟しまし貸せ沖に出でて波立ち来やと見て帰り来む

(一七・四〇三二 田辺福麻呂)

⑩ 波立てば奈呉の浦廻に寄る貝の間なき恋にそ年は経にける

(一七・四〇三三 田辺福麻呂)

⑪ 奈呉の海に潮やはや干ばあさりしに出でむと鶴は今そ鳴くなる

(一七・四〇三四 田辺福麻呂)

⑫ ……いつがりあひてにほ鳥の二人並び居 奈呉の海の奥を深めて さどはせる 君の心の すべもすべなさ

(一八・四一〇六 家持)

⑬ ……行く水の いや増しにのみ 鶴が鳴く 奈呉江の昔の ね

もころに 思い結ばれ 嘆きつつ……

(一八・四二一六 家持)

⑭……思うそら 苦しきものを 奈呉の海人の 潜き取るといふ  
白玉の 見が欲し御面…… (一九・四一六九 家持)

⑮あゆをいたみ奈呉の浦廻に寄する波いや千重しきに恋ひ渡るか  
も (一九・四二二三 家持)

以上の一五例である。これを見れば、①②③④の巻七の撰津奈呉の海の歌から全くといってよいほど影響を受けていない。越中奈呉の海の歌は大目秦忌寸八千鳥から始まり、家持がこれより影響を受けて様々に詠んでゐる。国庁、国守館より常々眺望することができ奈呉の海を家持は詠まずにはいられなかつた。京育ちの家持が越中の海辺の風景に心を動かし、それを積極的に歌い込もうとしたのである。⑤の八千鳥の歌は奈呉の海に早朝漁に出る海人の釣舟を活写している。しかし、⑥の家持の宴席歌は、⑤に較べて、奈呉の海は序詞として用いられたにすぎない。奈呉の海を写實的に把え歌つたのは、⑦⑧即ち天平二十年春正月の四〇一七、四〇一八歌で、先の⑥とは違い写真に富んでおり、早春の奈呉の海の寒々とした風景をこまやかに把え出している。ところが、この二首の写真描写には先行歌がある。天平十九年四月三十日に家持が詠んだ長歌の一節がそれである。

京に入ること漸く近づき、悲情撥ひ難しくて、懷を述ぶる一  
首并せて二絶

かき数ふ 二上山に 神さびて 立てるつがの木 木も枝も  
同じ常磐に はしきよし 我が背の君を 朝去らず 逢ひて言  
聞ひ 夕されば 手携はりて 射水川 清き河内に 出で立ち  
て 我が立ち見れば あゆの風 いたくし吹けば 湊には 白

大伴家持天平二十年春正月の歌——写真と類型について——

波高み 妻呼ぶと 渚鳥は騒く 葦刈ると 海人の小舟は入

江漕ぐ 梶の音高し そこをしも あやにともしみのひつ

つ 遊ぶ盛りを 天皇の 食す国なれば 命持ち 立ち別れな

ば 後れたる 君はあれども 玉梓の 道行く我は 白雲の

たなびく山を 岩根踏み 越え隔りなば 恋しけく 日の長け

むそ そこ思へば 心し痛し ほととぎす 声にあへ貫く 玉

にもが 手に巻き持ちて 朝夕に 見つつ行かむを 置きて行

かば惜し(一七・四〇〇六 家持 天平十九年四月三十日)

この長歌は、正税帳史として上京する日が間近になったころ、家持が池主に贈つたものであり、天平十九年四月二十日の⑥の歌より十日後に作られた。この長歌には傍線のような表現がみえる。

小野寛氏は家持の天平二十年春正月四首について「第一首四〇一七と第二首四〇一八は右のように四〇〇六歌から構成されたと思われる。あゆの風がいたく吹けば、水門にその風が吹き寄せ、白波が高く立つのを、『あゆの風いたく吹くらし』と『水門風寒く吹くらし』と重ねたのであろう」と考察される。さらに遡つて、池主の「……馬打ち群れて 携はり 出で立ち見れば 射水川 湊の渚鳥 朝なぎに 濁にあざりし 潮満てば 妻呼びかはす……」(一七・三九九三 天平十九年四月二十六日)に、四〇〇六歌への影響をみることもができる。池主の長歌の表現を含みこみ、四〇〇六歌の自然描写が成立した。ここで注目すべきは、家持が「奈呉の海の沖つ白波しくしく」という大雑把な奈呉の海の把え方と、序詞としての機能から離れて、射水川河口即ち奈呉の海を、「あゆの風 いたくし吹けば 湊には 白波高み 妻呼ぶと 渚鳥は騒く 葦刈ると 海人

の小舟は 入江漕ぐ 梶の音高し」と詠む、この六十字に及ぶ湊の風景描写と自然描写意識であろう。

越中の朝夕に見やる射水川から奈呉の湊の風景を、この長歌の描写はよく表現しており家持は氣に入っていたのか、これをベースに一年後の天平二十年春正月、奈呉の海の短歌を作歌する。

次に第二首、四〇一八歌。

湊風寒く吹くらし奈呉の江に妻呼びかはし鶴さはに鳴く

（一に云ふ「鶴騒ぐなり」）

は、第一首・四〇一七歌と同じく奈呉の江の風景である。「らし」という推定の助動詞が付いているので、前歌と同じく作者の視点は海から遠く、おそらくは国庁あたりで眺望していたと推測される。前にも述べたように、これは、一七・四〇〇六の「あゆの風いたく吹けば 湊には 白波高み 妻呼ぶと 渚島は騒ぐ」の写実描写をさらに進めて、鶴が鳴く奈呉の江の寒々とした光景を詠んでいる。ここで「鶴さはに鳴く」は、集中三例ある。鶴が集中四十五例詠まれているのに対して、この表現は三例しかない。

磯の崎漕ぎたみ行けば近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く

（三・二七三 高市連黒人）

鳥伝ひ敏の崎を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さはに鳴く

（三・三八九 若宮年魚呂誦之。但未審作者）

と、四〇一八歌の三例のみである。類似表現に、

沖辺より潮満ち来らし可良の浦にあさりする鶴鳴きて騒ぎぬ

（一五・三六四二 遺新羅使）

とあるが、意外に少ない表現である。特に高市連黒人の歌は、「高市連黒人の羈旅の歌八首」の中からの一首であり、その前には「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る」（三・二七二）もあり、黒人の羈旅歌からの影響は看過できず望郷というテーマを引き継いでいる。この天平二十年春正月四首のすぐ前に、黒人の、婦負の野のすすき押しなべ降る雪に宿借る今日し悲しく思ほゆ

（一七・四〇一六）

が置かれているのも単なる偶然ではなからう。望郷、よるべなく揺らぐ旅愁等発想上も、語句の上からも、黒人を基底にして作歌したのではないかと考えられる。

第三首、四〇一九歌について

天離る鄙とも著くこだくも繁き恋かも和ぐる日もなく

「天離る鄙」は集中二十四例中、家持十二例。越中に赴任して以来、繰り返し用いる。「こだくも」或いは「ここだ」は、こんなにも数多く、こんなにもひどくの意で集中三十四例と多い。その半数が、恋の歌と結びついて、つる恋心の表現となっている。家持の「こだくも繁き恋かも」は、先行歌の類型的な発想、表現をなぞることによって、安定した懐かしいしらべをもつことになる。

下旬の「繁き恋かも和ぐる日もなく」は、類同表現はない。集中、和ぐは七例、そのうち家持は五例と多い。七例とも望郷、相聞をテーマとしている。家持の五例は、青春時代に坂上大嬢に送った、

相見てばしましく恋はなきむかと思へどいよ恋まさりけり

（四・七五三）

を初出に、三十三歳の「うつせみは 恋を繁みと 春まけて 思ひ  
繁けば 引き攀ちて 折りも折らずも 見むごとに 心和ぎむと…  
」(一九・四一八五、天平勝宝二年四月)という長歌まで用いら  
れる。つるの思いがやわらく(和ぐ)と思つたが、ますますつる  
という形で家持は使う。

家持にしては激しい望郷と妻恋いの歌であるが、手練れた表現を  
用い、発想も新鮮味に乏しい。しかし、それ故の安定感がある。

次に四〇二〇歌について考えていこう。

越の海の信濃浜の名なりの浜を行き暮らし長き春日も忘れて思へ  
や

「越の海の、信濃の浜を歩いて日を暮らし、その長い春の日にも、  
京恋しさを忘れられようか、忘れられはしないのだ」という意であ  
る。越の海は、高沢瑞信の『万葉越路の葉』に「比濱は奈古海濱と  
奈古入江の間の濱路にて今も旅人往来する所なるべし。今古名を失  
へば其所さだかならず。今も放生津新町に信濃祭といふ祭禮あり、  
土人は詛言してシナン祭と呼べり」とある。また、富田景周の『楯  
葉越枝折』には魚津の海浜説があるが、四〇一七・四〇一八の奈良  
の江の歌と同日の歌と考えられるので、魚津説は遠すぎる。

「行き暮らし」は『万葉集全注』には、歩いて一日を暮らしとい  
う意とあり、集中四例。

……我が行く川川隈の 八十隈おちず 万たび かえり見  
つつ 玉梓の 道行き暮らし あをによし 奈良の京の 佐保  
川に 行き至りて……  
(一・七九 作者未詳)

大伴家持天平二十年春正月の歌——写真と類型について——

あしひきの山行き暮らし宿借らば妹立ち待ちて宿貸さむかも

(七・一二四二 作者未詳)

豊国の企救の長浜行き暮らし日の暮れ行けば妹をしぞ思ふ

(一一・三三二九 作者未詳)

……娘子らが 夢に告ぐらく 汝が恋ふる その秀つ鷹は 松  
田江の 浜行き暮らし つなし捕る 氷見の江過ぎて……

(一七・四〇二一 家持 天平十九年 思 放逸鷹、夢見感悦作歌)

と、四〇二〇歌である。橋本達雄氏が指摘されたように、一一・三  
二九歌の気分を一番引きずっている。しかし、家持の先行歌四〇  
一一の「松田江の浜行き暮らし」という長歌の一節も忘れてはなら  
ない。第一首、二首が、長歌の一節から派生して新しい短歌になっ  
たように、第四首も長歌の一節から派生した歌とも考えられる。家  
持は天平十九年から二十年にかけて長歌を立て続けに詠むが、長歌  
制作の後、手元に未整理の歌が残った。そのような歌をもとに四首  
が成ったのではないかと考えても捨てられない。

「長き春日」という表現も歌に独特の趣きを与えている。

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず むらきも  
の 心を痛み ぬえこ鳥 うら泣き居れば……

(一・五 軍王)

春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ

(五・八一八 山上憶良)

霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも

(五・八四六 小野淡理)

さにつらふ妹を思ふと霞立つ春日もくれに恋ひ渡るかも

(十・一九一) 春相聞 作者未詳

恋ひつつも今日は暮らしつ霞立つ明日の春日をいかに暮らさむ

(十・一九四) 春相聞 作者未詳

おほほしく君を相見て菅の根の長き春日を恋ひ渡るかも

(十・一九二) 春相聞 作者未詳

朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮らさむ

(十・一九二五) 春相聞 作者未詳

相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮らさむ

(十・一九三四) 作者未詳

相思はずあるらむ児故玉の緒の長き春日を思ひ暮らさむ

(十・一九三六) 春相聞 作者未詳

……玉梓の 使ひの来ねば 霞立つ 長き春日を 天地に 思

ひ足らはし……我が恋ふる 心の中を 人に言ふ……待つこと

遠み 天伝ふ 日の暮れぬれば……

(一三・三二五八) 作者未詳

越の海の信濃の浜を行き暮らし長き春日も忘れて思へや

(一七・四〇二〇) 家持

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しむひとりし思へば

(一九・四二九二) 家持

「春日」は集中十七例。その中で「長き春日」という表現は七例である。右に一部挙げたように比較的慣用の言い回しである。卷十の一九一四や一九二二、一九二五、一九三四、一九三六等の春相聞の趣き、即ち長い春の日のためたうような恋情を四〇二〇は基底としている。

結句、「忘れて思へや」は、

大伴の三津の浜なる忘れ貝家なる妹を忘れて思へや

(一・六八) 身人部王

夏野行く小鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや

(四・五〇二) 柿本人麻呂

須磨の海の塩焼き衣なればか一日も君を忘れて思はむ

(六・九四七) 山部赤人

思ひ寄り見寄りて物はあるものを一日の間も忘れて思へや

(十一・二四〇四) 人麻呂歌集

あらたまの年は果つれどしきたへの袖交へし児を忘れて思へや

(十一・二四一〇) 人麻呂歌集

妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れて思へや

(一五・三六〇四) 作者未詳

越の海の信濃の浜を行き暮らし長き春日も忘れて思へや

(一七・四〇二〇) 家持

垂姫の浦を漕ぐ舟楫間にも奈良の我家を忘れて思へや

(一八・四〇四八) 家持

とある。集中八例中、二例が家持である。一・六八の「大伴の三津の浜なる忘れ貝家なる妹を忘れて思へや」が家持の念頭にあったと思われる。人麻呂、赤人、人麻呂歌集に四例あり、天平年間の歌が多い卷十等に全く用例がないことから、家持の時代では古風な言い回しであったと考えられる。家持はあえてその古めかしい表現を取り入れて、懐かしく郷愁をさそう歌の調べを作ろうと試みたのではないか。ここでは類型的表現を巧みに取り入れることで、『窪田空



穂評釈」が「『忘れて念へや』は強い語であるが同時に婉曲なもので上からの続きでおほらかに上品に旅愁を現してゐるものである」というように、古風で品がよく、しかも誰にでも受け入れやすい郷愁をさそう調への歌を意識的に作歌する。

#### 四

以上、天平二十年春正月の四首を詳しく見てきた。なお、この四首の構成について、小野寛氏（前掲書）、森朝男氏（前掲書）橋本達雄氏（『大伴家持作古歌論攷』）等が連作か否かについて論じられている。連作という概念は後代のもので、万葉歌をどこまでその概念で規定できるかは難しい。この歌群は長歌制作から派生した未整理歌をまとめて作り直し並べたという趣きがあり、強い連作構成がつかめなかつた。これについては稿を改めて検討したい。

最後に、天平二十年春正月の歌群を、先行歌との影響関係をみながら、写実と類型について考えてきた、その作業のまとめとして、次のようなことが言えよう。

家持が奈呉の海を詠んだ歌は、八千島の一七・三九五六歌を発端とし、七巻の撰津奈呉の海の古歌には全く影響を受けていない。伏木の国庁や館あたりから朝夕眺めた奈呉の海の実景を家持は写実的に詠もうとする。一七・四〇〇六の自作長歌の一部で、奈呉の海の渺々とした光景を描き把え、積極的にあゆの風という俗語を取り入れもする。そして、天平二十年春正月の四〇一七、四〇一八歌では、奈呉の海を改めて中心におき、海辺の風景を動的に詠む。また、四〇一八歌では「あゆの風」を「湊風いたく吹くらし」に変え、「鶴

さわに鳴く」の表現を黒人の先行歌よりすくい取ることで、伏線として旅愁妻恋いを詠む。強く吹く風に波にもまれながら見え隠れする小舟に、寄るべない己が心情を重ねていく。初春の荒い奈呉の海は、家持の孤愁と響き合う。これより後、家持は奈呉の海を序詞的にしか用いないのに反して、一七・四〇〇六から四〇一七、四〇一八の歌はきわめて写実的な把え方をしており、この時期の家持の作歌意識の特質を物語っている。

前二首が具象的、写実的な歌であるのに対して、後の四〇一九、四〇二〇歌は、類同表現を積極的に取り入れて、郷愁を抒情的に歌い込んでいく。

四〇一九の「こだくも繁き恋かも」は、その先行相聞歌の類同表現と発想をなぞっている。しかしなぞることで分かりやすい望郷の歌ともなっている。四〇二〇歌は、一・六八や十二・三二一九を下敷きにしているが、先行歌を巧みに享受して家持らしい歌風をみせている。「長き春日」と春愁相聞を漂わす巻十の表現を引き、妻恋いをより洗練された形で歌う。加えて、家持と同時代人はもう使わなくなつてしまった「忘れて思へや」という表現を取り入れることによって、歌に古風でおおらかな調べを作り、いっそうノスタルジーを深めるものとしている。

前二首が、俗語を取り入れたり、きわめて写実的な情景歌であるのに対し、後二首は古体を取り入れ懐かしい郷愁をさそう歌いぶりで、彼自身の望郷と妻恋いを詠む。

一方で新しい素材、実景を表現しようとする作業と、類型を積極的に取り入れることで、類歌がもつていた趣きも含みこむ新たな類

型歌制作の作業と、二つの相反する作業が、この四首では行われている。ここでは、第一首、第二首の進取の姿勢に対して、第三首、第四首に古風な表現を取り入れて類型的普遍的な抒情に寄りそって歌おうとする姿勢が二様に表われており興味深い。この傾向は、家持の歌風の一つの特色と言えよう。

天平十九年は、「忽沈<sub>一</sub>枉疾<sub>二</sub>、殆臨<sub>三</sub>泉路<sub>一</sub>。仍作<sub>二</sub>歌詞<sub>一</sub>、以申<sub>三</sub>悲緒<sub>一</sub>」より始まり、「守大伴宿禰家持贈<sub>二</sub>掾大伴宿禰池主<sub>一</sub>悲歌」「更贈歌」「述<sub>二</sub>恋緒<sub>一</sub>歌」「二上山賦」「遊<sub>二</sub>覽布勢水海賦<sub>一</sub>」「立山賦」「入<sub>レ</sub>京漸近、悲情難<sub>レ</sub>撥、述<sub>レ</sub>懷」「忽見<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>京述<sub>レ</sub>懷之作<sub>一</sub>、生別悲忽、斷腸万廻、怨緒難<sub>レ</sub>禁、聊奉<sub>二</sub>所心<sub>一</sub>」「思<sub>二</sub>放逸鷹<sub>一</sub>、夢見感悅作」と、続けざまにこれだけの長歌を家持は作る。この長歌制作の過程で、そして新しい越中の風土に触発されて、京ぶりの模倣的で類型的な発想がほころび、彼独自ののびやかな歌が生まれてくる。小さな歌群であるが、天平二十年春正月の四首は、家持の歌風が大きく成熟していくうねりの中に位置している。類型から脱皮して写実へ、具象へと向かう作歌意識と、抒情的な面では類歌を含みこみつつ、それをさらに彼独自の抒情性に組み替えようとする作歌意識とが鮮やかに見え、家持の歌風が熟成していく方向がうかがえる特色のある歌群である。

## 注

- (1) 窪田空穂『万葉集評釈第十卷』（東京堂出版 昭六〇・新訂）  
 (2) 山口博『万葉の歌15・北陸』（保育社 昭六〇）  
 (3) 石井良介『体系日本史叢書4・法制史』（山川出版社 昭三九）

- (4) 犬養孝『万葉の旅・下』（現代教養文庫 昭三九）  
 (5) 川口常孝『大伴家持』（桜楓社 昭五二）  
 (6) 同右  
 (7) 橋本達雄『万葉集全注・巻十七』（有斐閣 昭六〇）  
 (8) 高岡市万葉のふるさとづくり委員会編『大伴家持と越中万葉の世界』（雄山閣 昭六一）  
 (9) 小野寛『東風あゆの風考』、『駒沢国文』昭六三・二  
 森朝男『天平二十年正月連作四首』、『セミナー古代文学』86・  
 家持の歌を読むⅡ』昭六一・八  
 (10) 小野寛『東風あゆの風考』  
 (11) 小野寛『大伴家持天平二十年正月四首の構成』、『論集上代文学一六冊』（笠間書院 昭六三）  
 (12) 窪田空穂『万葉集評釈第十卷』  
 (13) 橋本達雄『万葉集全注・巻十七』